

本紙記者・広島報告

7月の国連での核兵器禁止条約の採択や、昨年5月のオバマ前米大統領の広島訪問を経て、海外からの関心が高まるヒロシマ。このようにして悲惨な原爆被害を世界に伝えていくのか。自身も被爆経験を持つ歴史研究家の森重昭さん(80)は広島市西区に、広島で被爆した12人の米兵の独自調査で世界の注目を集めた。原爆で亡くなった人々には悲しむ家族が必ずいた。そこに敵味方や国籍は関係ない。戦争の残酷さ、平和の尊さを訴える。原爆投下から72年が経過した広島では、被爆建物の保存も展示資料のリニューアルも進んでいる。(社会部 大沼雄大)

閃光と爆風 た死体の焼却が始まった。虫の息だが、まだ生きていた人も目の前で焼かれた。半焼の死体をむさぼり食うため、飢えた野犬も集まってきた。まさに地獄のようなきらみで響き、閃光と強烈な爆風にさらされた。今も住むべき町という町にいて、爆心地から約2.5キロ。友だち2人と授業を受けに行く道中だった。木の葉のように吹っ飛ばされた。煙もほこりも10センチも見えない。30分くらいすると、暗闇が覆ってきた。目の前に近づいてきた女性は全身血まみれで、胸が裂けていた。両手には飛び出た胃袋らしき臓器を抱え「病院はここ」と聞いてきた。その時、上空から再び聞こえたB-29の爆音。「また爆弾を落とされる」と恐怖を感じて走って逃げた。道路のいたるところに倒れた人たちの顔や胴体を踏みつけながら。翌日、学校の校庭に並べられ

被爆死米兵を独自調査

森重昭さん(歴史研究家・広島市)

敵味方ない

いく米兵の死が語り継がれていく米兵の死が語り継がれていく。被爆した米兵はいたのか。彼らの死を知り、悲しむ連隊がある事実は、日本だろうが米軍だろうが変わらない。休日を使い、1人で調べるようになった。原爆投下の1週間ほど前の7月28日、広島市の呉沖で日本の戦艦から対空砲火を受けて墜落した米軍爆撃機が2機あった。状況を知る現地の住民を訪ね歩き、墜落後に捕虜となった米兵を特定する手がかりを探した。同時に、過去の新聞記事や海外の雑誌記事、米軍政府の公開資料を収集して読み込んだ。学者でもない会社員だから、資料提供を拒否されることや、逆に米国防総省に調べられることもあった。何で一市民がそんなことをするのか。



森重昭さんを抱き締めるオバマ前米大統領。2016年5月27日、広島市中区の平和記念公園。

△メモ原爆投下の1週間ほど前、広島市の呉沖で日本戦艦から対空砲火を受けて墜落した米軍爆撃機「ロンサムレイター」号「タロア号」の存在を基に、森さんは被爆死した米兵を約40年間にわたり調査。墜落後に捕虜になった乗組員のうち、12人が原爆で亡くなったとして身元を特定した。

年間でようやく認められたと実感した。演説を終え、こちらへ歩み寄ってきたオバマ氏と面と向かった瞬間、涙がにじみ出てきた。言いたいことはたくさんあったが声にならない。何と声を掛けられ、何を答えたのかも覚えていない。ただ、オバマ氏が核兵器の廃絶を真剣に考えていることは伝わってきた。

非人道性、共通認識へ 広島市立大広島平和研究所の本和実副所長の話。米兵が被爆死した事実は、原爆がひとたび使用されると、敵も味方も関係なく人々が無差別に殺されることを、原爆を落とした米国人の人々に痛感させた。

森さんは地道な活動により、その事実を発掘しただけでなく、被爆死した米兵に寄り添い、彼らの死を悼み、連隊と交流を継続することで、日米間に原爆の非人道性に関する共通認識を形成することを促した。

経年劣化の建物 保存へ 改修補助費引き上げ

原爆投下から72年が経る木造建物に対し、たち、原爆ドームを含む広島市内の被爆建物の保存が進められている。1993年に始まった市の改修補助制度には現在、86件の被爆建物が登録されている。市は補助金の活用を促し、民間の建物の保存にも努めている。約30人全員が亡くなった原爆ドームは、核兵器の恐ろしさを示す象徴的な建物として、保存に向けた定期的な調査と補修が続く。15年にも耐震補強工事が行われたが、経年劣化でいつかは保存できなくなる時を迎える。市の担当者は「被爆者の高齢化が進む中、当時の実相を伝える貴重なツールの一つとして、できるだけ寿命を延ばしていきたい」と話した。

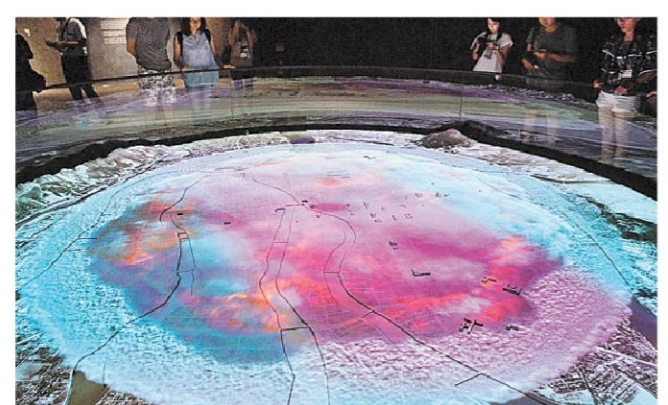
原爆の悲劇

再現画に捕虜 大卒卒業後、証券会社に就職。その後音楽とは無縁だったが、名が知れていた日本楽器製造(現ヤマハ)に中途入社し、地元(広島支店)に配属された。40歳ごろ、僕が経験した戦争中、地元の小学校でこのくらいの犠牲者が焼かれたかを気になって調べた時、被爆者が再現した原爆の絵に触れた。二枚以上目に目を通した中で、気が付いたことがあった。米兵捕虜連の絵が25点ほど存在していた。広島市の郊外で墜落したB-24爆撃機、相生橋でボールに縛り付けられている米兵、広島城付近を進行されて



自宅で取材に応える森重昭さん。6日、広島市西区。

もり、71歳。1937年広島市生まれ。8歳の時に被爆を体験した中央大卒業後、11証券を経て、67年に日本楽器製造(ヤマハ)入社。仕事の傍ら、広島で被爆した米兵について独自調査を続け、公表されていない12人の米兵の存在を明らかにした。2016年5月、現職米大統領として初めて広島をオバマ大統領が訪れた際に、式典に招待された。16年に優れた文化活動に対して贈られる第64回菊池寛賞。17年に日本記者クラブ特別賞を受賞。



平和資料館を一新 「被爆再現人形」は撤去

広島平和記念資料館(広島市中区)の東館が4月にリニューアルオープンし、新たな展示機器が来館者を迎えている。2018年7月までリニューアル工事が続く本館でも、これまで展示されてきた「被爆再現人形」が撤去され、新たな資料の展示が検討されている。東館には新しく原爆投下前後の街の風景を再現するプロジェクト「クシヨウマツリ」が導入された。イトバノラマが導入された。直径5.5メートルの模造機にCG映像が投影され、爆心地から半径2.5キロの街が原爆で破壊されていく様子を知ることができる。本館のリニューアルでは被爆



当時の人々を再現した人形は撤去されることになった。皮膚が焼け垂れ下がった女性の子も、人形は資料館の展示の歴史として、収蔵庫に保管されるという。

本館のリニューアルで撤去される被爆再現人形(広島平和記念資料館提供)



昨年まで耐震補強工事が行われた原爆ドームの内部。7月下旬、広島市中区。